ドラム缶工業会会報

ひびき

CONTENTS

1 平成26年賀詞交歓会
4 第8回AOSD国際会議開催さる
6 台湾視察レポート
8 平成25年 暦年出荷実績

68

ドラム缶工業会　小原 知実 理事長

平成26年 賀詞交歓会

理事長挨拶　工業会活動計画について

ドラム缶工業会の賀詞交歓会が1月9日（木）午後5時30分から、鉄鋼会館（東京都中央区）で開催されました。冒頭、挨拶に立った小原知実理事長は、本年の課題や活動について下記のように述べました。

皆様、新年、おめでとうございます。本日は、大変ご多忙な中を、経済産業省山下隆一鉄鋼課長様をはじめ、多くの皆様のご出席を賜り、誠にありがとうございます。新年にあたり、ひとことご挨拶をさせていただきます。

昨年の我々を取り巻く経済環境ですが「アベノミクス」の金融・財政政策により、一時は1ドル80円を割った円高為替が104円へと是正され、また株価も8,000円台からほぼ16,000円レベルへと上昇しました。

また海外では、中国をはじめとする新興国経済はスローダウンしたものの、欧州経済は何とか小康状態を保ち、米国経済も政治課題をクリアし、QE3による好調さを維持するなど、日本経済全体としては、穏やかな回復軌道に乗り始めたといえるのではないかと思います。

私自身、昨年からこの会に参加させていただいており、まだ短い経験ではありますが、皆様のお顔も昨年と比べますと、一段と明るくなったように思われます。楽観はできませんが、かつて日本企業を取り巻いていた6重苦は、アベノミクスの三本の矢、とりわけ今後の成長戦略により克服できるとの明るい期待が、経済界には高まってきました。

さて、我々ドラム業界につきましても、数量面では2011年度以降、2013年上期まで漸減傾向が継続しておりましたが、この下期に入りトレンド反転とまでは言い切れないとしても、毎月の出荷量が前年実績をわずかに上回るようになってきました。これは明らかに希望の持てるサインだと思いますが、一方において、需要業界の一部の皆様からは「環境は好転したものの、実需の増加はいまだに実感できない」との慎重な発言も多く、ドラム業界としましては、今年一年は、需要動向を注視しながら、的確に対応していくべき、大切な時期だと考えています。

そうした中での、本年のドラム缶工業会の活動についてでありますが、まず初めに、安全について申し上げます。我々の最優先課題である「安全」については、2006年から「会員各社の災害事例　共有化」による「類似災害　撲滅活動」を継続しており、各社独自の取り組みと、工業会活動が相まって、かつて業界全体で年間20件程度あった災害件数が顕著に減少し、不休災害のみとなっています。これは会員各位のご努力の大きな成果であると思います。引き続き、目標である「完全無災害の達成」まで、それぞれさらに智恵を絞り、積極的な取り組みをお願いします。

次に、工業会の活動方針としては、やはり、技術を中心とした活動を推進していきたいと思います。日本のドラム事業の圧倒的な競争力は、「高い技術力」と「デリバリーの信頼性」にあると考えており、ドラム製造に関わる総合的な技術力の向上、ひいては「ドラムによる物流の、需要家満足度の向上」のため、技術部会による「各種規格・規則の改善検討」をはじめとして、多方面の活動の展開を図っていきます。

海外活動としては、2013年11月にタイ国において開催された第8回AOSD国際会議が、最大のイベントとして挙げられます。新缶ドラムの国際会議としては、現在において唯一ということもあり、17の国・地域から約200名の参加者を迎え、16件の技術的課題について、熱心な発表・質疑が行われました。また、今回のAOSD国際会議は、タイのドラム缶メーカー2社の真摯な協力のもと、日本のドラム缶工業会がタイ国において、ホストとして海外でオーガナイズした技術会議でもありました。会員の皆様の積極的なご協力、工業会事務局の努力もあって、海外参加者の皆様からも大変有意義な大会であったとの評価をいただきました。この場をお借りいたしまして、皆様の多大なご協力に厚く御礼申し上げます。

また、この技術交流の成果に後押しされて、次回2016年のAOSD国際会議はインドが主催国として立候補いたしました。「アジア・オセアニアにおけるドラム物流の技術力の確保と発展」を目指し、我々ドラム缶業界もテーマあるいはプレゼン・スキームの検討など、今年から準備を開始し、引き続き支援していく考えです。

加えて、このような会員のための健全な工業会活動を促進するため、ご承知のようにドラム缶工業会は「競争法コンプライアンス規定」を制定しておりますが、本年はさらに一歩を進めて、「独禁法の専門弁護士」を招いた勉強会の開催を予定していますので、皆様の奮ってのご参加をお願いします。今後も、会員の皆様の健全な発展のため、ドラム缶工業会活動を積極的に推進していく所存ですので、積極的なご参加をお願いします。

最後となりましたが、本年一年が、皆様並びにご家族の皆様、工業会にとって実り多い年となることを祈念し、新年にあたっての挨拶とさせていただきます。

引き続いて来賓を代表して、経済産業省製造産業局鉄鋼課の山下隆一課長より、祝辞をいただきました。

あけましておめでとうございます。本日は、ドラム缶工業会の賀詞交歓会にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

昨年、この場で挨拶してから一年が経ちましたが、先ほど理事長のお話のように、経済状況はかなり好転している状況にあります。数字の話をしますと、実質GDPは2013年7～9月期まで4四半期連続のプラスで推移、これは明らかに経済がマイナス成長からプラス成長へと変わってきている一つの証拠だと思います。もう一つ興味深い数字が日銀短観のDIに表れています。昨年12月の調査でみると、大企業と

中堅企業の製造業分野と非製造業分野で、ともに9月時点からプラス幅を広げています。また、中小企業も製造業が9月のマイナス9から12月にはプラス4になりました。実は、6つの区分の指標がすべてプラスになったのは、バブルの崩壊する前の1991年以来のことです。そういう意味では、少なくとも数字でみるうえで、かなり経済の状況はいい状態になっているようだと思います。

ただし、業界や地域によっても、大企業や中小企業の区分によっても、まだら模様が存在しています。そんな意味から、今届いていないところまで、景気の良さの実感が実際に伝わっていくようなことを、政策として引き続きやっていかなければなりません。懸念要素として消費税増税がありますが、5.5兆円の経済対策をすでに準備をしているなど、それらを材料にして乗り切っていきたいと考えています。

経済の循環を良くしていくために重要なことは、皆様の会社が収益を上げていただくことが真っ先です。そしてその利益を従業員さんや取引先に回していくことによって、新しい消費や投資に結び付いていく。こうした正の循環を作っていくことが、経済が本格回復するうえで、非常に重要な要素になると思います。また、マクロの経済状況は良くなってきているとはいえ、構造的な問題は決して解決されてはいません。グローバルに収益を上げられる仕組みづくりや競争力の強化を狙った事業再構築などが重要になっています。経済が上向きの時こそ、中長期を見据えて、変化と進化をぜひ遂げていたきたいと思います。皆様方とともに、すでに準備している各種施策を推進していく所存です。

こうして、明るいお正月を迎えたわけですから、元気良く、前に向かって進んでいかれますことをご祈念いたします。

来賓祝辞を受けて、野上正道副理事長（ジャパンペール社長）が乾杯の音頭をとりました。「ペール缶部門は、リーマンショック以降の数年間にわたり右肩下がりの非常に厳しい数字を展開しておりましたが、13暦年期1～6月はわずかですが前年を上回りました。さらに下期もプラスとなり、潮目はいい方向に変わり、今年は良い年になりそうだと感じています。また、昨年開催したタイのAOSD国際会議の後に、ペール部門は台湾メーカーを視察してきましたが、訪問先をみて非常に追い上げられているなと実感しました。日本の技術は世界トップクラスだと自負していますが、これに甘んじることなく、業界をあげて切磋琢磨して、素晴らしい技術を需要家に対して提案していきたいと思います」と述べた。**乾杯の発声の後、歓談に移った。**

中締めでは河島秀行副理事長（ダイカン社長）が挨拶しました。「2013年4月以降、エネルギーなどの値上げや、円安、素材をはじめ調達コストなどの上昇など、ドラム缶業界だけでなく、需要先とともに苦しさを共有した半年間だった。歴史は巡り合わせですが、工業会創立からの60年余の中で、足元では上昇機運にあるようです。ここからは、いよいよ数量増加を期待したいと、新年を迎えたところです。わくわく感を持ってこの1年をスタートしたい」と述べました。

経済産業省製造産業局鉄鋼課　山下 隆一 課長

ドラム缶工業会　野上 正道 副理事長

ドラム缶工業会　河島 秀行 副理事長

2014年の賀詞交歓会には関係省庁や関係諸団体、会員各社、ドラム缶工業会関係者ら180名が参加、盛況のうちに終了しました。

ドラム缶工業会
常務理事 事務局長
本田 信裕

第8回AOSD国際会議開催さる

平成25年11月11日～12日　タイ国パタヤ市

AOSD（アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会）の第8回国際会議が11月11日から12日の二日間にかけてタイ国パタヤ市のロイヤルクリフ・ホテルで開催されました。17の国・地域から約200名の参加者が集合し、盛大な国際大会となりました。会議の冒頭で、小原AOSD会長（日鉄住金ドラム社長）から「本会議のテーマである『技術がドラム缶の将来を拓く』を実感していただきたい」との開会の挨拶があり、ラタナチャイ・パタヤ市長代理、共同ホストであるタイのセンタイメタルドラム社のシンチャイ社長並びに来賓の方からご挨拶を頂いた後、各セッションの発表に入りました。

小原AOSD会長の開会挨拶

ラタナチャイ・パタヤ市長代理の来賓挨拶

共同ホスト シンチャイ社長の挨拶

共同ホスト ネート社長の大会総括

会議の全体風景

小野JSDA副理事長の閉会挨拶

セッション1では、ISDI（米国ドラム缶工業会）のスタビック会長から工業会の活動状況や米国内におけるドラム缶の優位性の説明があり、SEFA（欧州ドラム缶工業会）のリナルディーニ副会長からはドラム缶の恒久的なリサイクルを強調した講演がありました。次に本田AOSD事務局長からAOSDの主要5カ国の最近5年間の生産状況の説明を行い、最後にインドのグプタAOSD副会長からインドにおけるドラム缶の発展状況の講演がありました。

セッション2から4では技術論文の発表を行いました。ドラム缶工業会および会員関連会社からは6つの論文発表［東邦シートフレーム・斎藤ドラム罐工業、山本工作所・東京ドラム罐製作所、日鉄住金ドラム、前田製作所、ダイカン、JFE金属容器（上海）］があり、主に品質対策・自動化・環境対策の発表を行い、参加者の強い関心を集めました。設備関係では、ウェルダー3社（フェデラル、アープラス、ファイブスター）、ドラム缶関連4社（トライシャー、アメックス、ヤマハファインテック、ランスバーグ）、ペール缶関連2社（NPW技研、三友機械）の発表があり、活発な質疑応答が行われ好評を博するとともに、参加者にとってそれぞれの設備の比較ができるなど、国際会議ならではの成果が上がりました。

また、ドラム缶の素材となる冷延鋼板をタイで製造するサイアムユナイテッドスチールから冷延鋼板製造の詳細な説明があり注目を浴びました。

最後に共同ホストであるタイのタイメタルドラム社のネート社長から大会の総括があり、次に小野JSDA副理事長（JFEコンテイナー社長）から「2016年の次回のAOSD国際会議はインドで開催する」ことを宣言して二日間の幕を閉じました。

会議後にホテル内で行われたフェアウェル・パーティーは、アトラクションでタイダンスが行われるなど、参加者全員が寛いだ楽しい一時を過ごしました。

会議の翌日に、2コースのプラントツアー（半日コース：タイメタルドラムの見学、一日コース：サイアムユナイテッドスチールとセンタイメタルドラムの見学）が開催されました。両コースで約100名が参加し、受入側3社の熱心な説明と手厚い受入体制により、各見学場所で活発な質疑応答が行われ、タイのドラム缶および冷延鋼板製造技術の高さを認識することができました。

会場となったロイヤルクリフ・ホテルの外観

台湾視察レポート

ドラム缶工業会のペール委員会は4社7工場で構成されています。
構成会員会社はあらゆる分野の顧客に、最高品質のスチールペール缶を提供するため、製品品質、製造技術の向上に平素、邁進しております。
ペール委員会ではタイの第8回AOSD国際会議終了後、平成25年11月13日～16日の日程で台湾の製缶業界の調査、製缶機械メーカーの調査を目的に経営層を含めたミッションを派遣いたしました。

1. 訪問先

11月13日

バンコクから空路台北へ
新幹線で台中へ移動

11月14日

台中　彰化市　新益機械工廠股份有限公司　訪問
明新製缶工廠股份有限公司　訪問
泰元金属工業股份有限公司　訪問
新幹線で台北へ移動

11月15日

台北　苗栗県　敦和容器股份有限公司　訪問
台北市内ホームセンター　視察

11月16日

台北市内視察　帰国

2. 視察メンバー

氏　名	会　社
野上　正道（団長）	株式会社 ジャパンペール
稲田　健二	〃
松田　賢治	〃
辻　　忠弘	〃
関根　利三郎	新邦工業 株式会社
金子　賢三	〃
玉堀　勇二	〃
前田　洋	株式会社 前田製作所
石原　孝一	〃
長尾　浩志	株式会社 長尾製缶所
長尾　年晃	〃
長尾　隆	〃

3. 台湾のスチールペール缶市場

台湾のスチールペール缶は強度が必要なUN缶また内容物が高価で金属印刷された美装性の高い容器としての需要が中心でした。
一般品はプラスチックペールが使用されていました。

4. 製缶機械メーカーの訪問

新益機械工廠股份有限公司を訪問しました。
機械設計、部品の製作、機械の組立てまでの品質管理、精度管理を行い、優れた製缶機械を一貫して製作する優秀な会社であるとの印象を受けました。
機械精度は部品の加工精度や加工技術並びに組立て精度によりますが、部品の加工設備、寸法測定器は日本製を使用していること、部品加工や組立ての作業者のスキルの高さから推察して、完全に日本の製缶機械メーカーと同等かそれ以上と判断しました。
今後、ペール缶用製缶設備について、必要があれば同社と検討を行いたいと思います。

5. 小型食缶メーカーの訪問

明新製缶工廠股份有限公司を訪問しました。
缶詰用603（φ153.4mm）、401（φ98.9mm）、301（φ74mm）の小型金属缶をスードロニックの溶接機、新益機械の胴体成形機を使用し高速で製缶していました。
2階の狭いスペースにラインを立体的に配置し、溶接機から缶パレタイジング装置まで全自動で能率良く製缶していました。
亜熱帯地域であるので窓が開放されており、空調設備の無い工場でした。ちょうど30年前の日本における中小食缶工場をみるようでした。
製品は東南アジア向けの比重が高いとのことでした。

6. 金属印刷業者の訪問

泰元金属工業股份有限公司を訪問しました。

1972年創立の金属印刷会社で魚、果実、飲料用の缶詰缶や飲料缶、スプレー缶、ミルク缶用の金属印刷を大規模に行っていました。

印刷ラインは冨士工業製のプリメックスの最新機を6ライン、塗装ラインはドイツMAILANDER社のコーターを5ライン設置していました。

工場内は空調がされていて、印刷機周辺は防塵シートで囲いコンタミ対策を行っていました。

クリーンな環境で、最新の印刷機を稼動させ、能率良く高品質な金属印刷を行っていました。

日本の金属印刷業界が縮小傾向にある中、同社は輸出を中心に業績を伸ばしているとのことです。

7. スチールペール缶メーカーの訪問

敦和容器股份有限公司を訪問しました。

同社は前田製作所殿の出資会社で前身の会社から40年の歴史を有し、完成された工場との印象を受けました。

董事長、総経理は日本人が務められ、お二人の指導で従業員はキビキビと働き、工場内は整理整頓が行き届いていました。

12L～27Lのスチールペール缶、2.5L～20Lのプラスチックインジェクションペール、0.7L～4Lプラスチックブロー容器、0.55L～1L金属容器の製造および小型容器の充填作業を行っていました。

容器製造会社が石油元売会社と提携して、容器の製造から潤滑油の充填までを行い出荷するという業務形態は日本ではありません。

これらは、容器会社の付加価値を高め、石油元売会社にとっては品質の確保また現地での偽製品の防止などの利点があるとの説明でした。スチールペール缶の売り上げ比率は約10%とのことでした。

8. プラスチック容器の回収について

国が資源ゴミとして回収するシステムが確立しています。ただし、16L缶以上は適用されないとのことです。

回収費用は容器会社が負担するのではなく、最終製品製造会社が数量に応じて負担します。

プラスチック容器にはリサイクルマークが印字されていました。

9. ホームセンターの視察

台北市の特力屋を視察しました。

スチールペール缶は20L防水塗料缶のみが陳列されていました。

ラグ天板のPLカールは加工していませんでした。

10. まとめ

ペール委員会においては、スチールペール缶の調査、新技術、新設備等の調査、合わせて、工業会会員各社の中堅、若手社員の技術力の向上等の人材育成を目的に、2003年に欧州、2007年に米国、2011年に欧州に海外ミッションを派遣いたしました。

今回、第8回AOSD国際会議終了後、台湾の製缶業界の調査、製缶機械メーカーの調査を目的に、経営層を含めたミッションを派遣しました。

わが国においてやや陰りがみられる製缶機械業界や金属印刷業界は、台湾においては企業規模も大きく輸出が中心で業績も良く、また設備も最新設備を導入していて、品質や技術水準も高く、我々の要求に充分対応可能であるとのことがこの度の視察を通じて確信しました。

将来において、訪問した企業とのビジネスを検討する価値があると判断いたします。

平成25年 暦年出荷実績

平成25年暦年出荷実績は、下の表に示す通りです。

200L缶は、前年比0.3%減の13,165千本とわずかに減少しました。用途別では、石油向け（前年比11.7%増）は増加し、化学向け（同0.1%減）、食料品向け（同9.2%減）、塗料向け（同1.3%減）は減少しました。

ペール缶は前年比0.6%増の19,286千本と増加しました。

亜鉛鉄板缶の200L缶、中小型缶のうち亜鉛鉄板缶・ステンレス缶も前年を上回りましたが、他は前年を下回りました。

（単位：千本）

缶種＼用途			石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年比（%）
普通鋼薄板	200L缶 （ ）は前年比 下段は構成比		1,540 (100.9) 11.7%	10,615 (99.9) 80.6%	679 (98.7) 5.2%	176 (90.8) 1.3%	155 (89.1) 1.2%	13,165	99.7
普通鋼薄板	ペール （ ）は前年比 下段は構成比		10,446 (101.8) 54.2%	7,627 (98.9) 39.5%	729 (103.3) 3.8%	0 - -	484 (99.0) 2.5%	19,286	100.6
普通鋼薄板	100L缶		0	104	5	0	3	112	97.6
普通鋼薄板	50L缶		0	88	0	0	2	90	97.3
普通鋼薄板	アス缶型		0	5	0	0	1	6	84.2
普通鋼薄板	その他容量缶		0	323	0	0	8	331	80.3
その他	200L缶	亜鉛鉄板缶	0	51	1	3	11	66	109.0
その他	200L缶	ステンレス缶	0	23	0	0	0	23	84.1
その他	200L缶	小計	0	74	1	3	11	89	101.2
その他	中小型缶	亜鉛鉄板缶	0	87	0	0	245	332	106.5
その他	中小型缶	ステンレス缶	0	10	0	0	0	10	133.1
その他	中小型缶	小計	0	97	0	0	245	342	107.1
合計			11,986	18,933	1,414	179	909	33,422	—
※前年比（%）			101.0	99.4	99.0	91.0	94.5	99.5	—
※構成比（%）			15.3	76.8	5.1	1.2	1.6	100.0	—

（注）※前年比および※構成比は、トン数による。総本数は、33,421,512 本。表上数値は四捨五入による差異がある。

会員

《正会員》
- 斎藤ドラム罐工業（株）
- JFEコンテイナー（株）
- （株）ジャパンペール
- 新邦工業（株）
- ダイカン（株）
- （株）東京ドラム罐製作所
- 東邦シートフレーム（株）
- （株）長尾製缶所
- 日鉄住金ドラム（株）
- （株）前田製作所
- （株）山本工作所

《準会員》
- 森島金属工業（株）

《賛助会員》
- エノモト工業（株）
- （株）大和鐵工所
- 三喜プレス工業（株）
- （株）城内製作所
- 東邦工板（株）
- （株）水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
（鉄鋼会館6階）
TEL 03-3669-5141　FAX 03-3669-2969
e-mail：drum.pail@jsda.gr.jp

URL：http://www.jsda.gr.jp/

ひびきNo.68（平成26年2月7日発行）

発行人　ドラム缶工業会
常務理事　事務局長　本田 信裕

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。